奥地にいた者の引揚げよりも遅くなったということであった。

敗戦という国家の一大事が、国民一人一人に重くのしかかった事実を忘れてはならない。そして、決して戦争という忌まわしいことが起こらないことを念じつつこの手記を終える。

私の故郷　満州！

東京都　金野達子

一　父の渡満から私の出生まで

私の父、金野福治は明治二十二（一八八九）年に、岩手県東磐井郡の千廐で生まれ千廐農蚕学校（現在の県立千廐東高校）を卒業してから、岩手県内の養蚕指導に従事していましたが、徴兵検査で甲種合格となり騎兵部隊に入隊して、随分、鍛えられたそうです。

無事に二年間の兵役を終えて故郷に戻り、明治二十七年生まれの、同じ県の大迫町出身のヨ子（ょね）と結婚しましたが、大正六（一九一七）年に関東庁巡査を拝命し夫婦で渡満したのです。

渡満後、関東州旅順の警察学校に入って教育を受けたのちに、安奉線（安東・奉天間）沿線の重要地点である本渓湖（ホンケイコ）の警察署に赴任しましたが、そこで大正九年に長女の孝子が生まれました。その後に同じ安奉線沿線の連山関（レンザンカン）に転勤、大正十一年には次女の安子が生まれました。

さらに、やはり同じ沿線の石橋子の警察署に転勤し、そこで大正十五年に私、達子が三女として生まれたのです。渡満して約十年、その間に三回も転勤して、それぞれの勤務地において子供を授かったということになりますが、このことは私にとっては全然記憶に無いことです。それから数年たった後には開原という所に移りました。

二　開原生活の思い出

開原は、連京線（大連・新京間）のちょうど中間ぐらいのところで、奉天（瀋陽）から北に約百

キロメートルほど離れていて、当時では汽車で奉天から約二時間ぐらいかかっていたと思いますが、満州の都市としては小さい方でした。水がきれいで大豆などの農産物の取引が盛んで、にぎやかな街でした。

市内の車担街というところに官舎があり、家族五人での生活がそこで始まったのです。姉たち二人は、開原尋常高等小学校に転入し、私は小学校に隣接した幼稚園に通うことになりました。幼稚園にはきれいな女の先生が二人おられて、楽しくかつ平穏な毎日でしたが、父は夜中でも何か事件があると、非常ベルで起こされ出勤していました。

当時は、満州事変の影響で匪賊が頻繁に出没していたので、父は馬に乗って匪賊討伐にも出動していました。匪賊討伐では、いつも私をかわいがってくれていた若い警察官が匪賊に撃たれて亡くなるという、幼いときの悲しい思い出が記憶に残っております。

官舎の窓にまで、匪賊の撃った流れ弾が飛んできて、室内の畳を窓側に積み上げて防いだこともありました。市街地にあった開原神社に、七五三のお参りに行ったとき、突然匪賊が襲来して来て逃げ帰った恐ろしい思い出も、断片的に覚えています。

そのうちに私も小学生になり、姉たちと同じ開原尋常高等小学校に入学しましたが、男女一緒の組で、担任は茨城県の水戸師範学校を卒業してすぐに、ここに赴任した川叉先生で、大変に教育熱心な先生でした。

毎年十月になると広い運動場を平らに掘って、そこに水をまいてスケート場を作りましたが、楽しくて三月ごろまでは毎日滑っていました。川叉先生はスケートは初めてだったようで、毎日熱心に練習されていて短期間でかなり上達されました。

しばらくすると、朝日街に新しくできた官舎に移ることになりましたが、この官舎の周囲は石塀

に囲まれていて、それは立派なところでした。二軒ずつ隣り合わせで建っていましたが、全部で十軒ありました。そこには同級生も三人ぐらいいて、毎朝誘い合わせて通学していました。

学芸会では、歌ったり踊ったりしましたが、運動会は父兄も全員参加で、それはそれはにぎやかなものでした。

その当時は、新年の四方拝、紀元節、天長節、そして明治節の四大節では全員が学校の講堂に集まって式が行われましたが、街の名士の人々も全員参列し校長先生が中心になって厳粛な式でした。年一回の開原神社のお祭りは毎年九月で、街中の人々がお神輿を担いでいましたし、大相撲大会もあってにぎやかで楽しい行事でしたし、「開原デー」と称した街全体の運動会もあり、仮装行列などもあって一日中楽しいことで、今でも懐かしく思い出されます。しかし、それらの行事が終わるとすぐに厳しい冬がやってきました。

私は幸いに、小学校の六年間は一度の転校もせずに開原生活を送っていましたが、父の転勤は相変わらずで、数年ごとに動いていましたが、今でいう単身赴任で、二ヵ所で警察署長をしたようです。随分と苦労したことと思います。

三　旅順高女に入学

昭和十四（一九三九）年三月、開原小学校を卒業し、四月に関東州の旅順高等女学校に入学しました。旅順までは開原から汽車で行くのですが、途中大連での乗換えを含めて約十二、三時間はかかっていました。

全校生徒の半数以上が旅順以外から入校した人たちで、そのために立派な寄宿舎がありました。私も生まれて初めて親元を離れて寄宿舎に入ることになりました。布団袋と身の回り品を詰めた行李（こうり）を持って、開原からの同級生四人と一緒に寄宿舎に入りましたが、最初の一年間はとても家が恋しくて、夜になると家族のことが頭に浮かんできて悲しくなり、ときには涙を流したこともありました。

寮では、上級生も同じ部屋で共に起居していて、その指導は厳しいものがありましたが、あとで振り返ってみると、貴重な団体生活を経験したことは、とても良かったと思っています。渡り廊下で学校全体がつながっていたのも良いことでした。日曜日には、舎監の先生の許可を受けないと外出もできないという厳しい寮生活でしたが、またと得られない良い経験でした。先生方もみんな優秀な方ばかりで、やはり明治四十四年創立という重みのある女学校で、ここの生徒となったことに誇りを持っていました。

旅順は、日露戦争の戦跡地でしたので、旧市街、新市街とが旅順駅を中心にして分かれていて、旅順にあった学校のほとんどは新市街にありました。学校では、夏になると旅順港での水泳訓練、二〇三高地への徒歩行軍があり、美しい旅順の市街を一望したときは、感激したものでした。部活動では、弓道部に入り四年間鍛えられて、卒業のときには二段を取りました。四年間の厳格な寄宿舎生活でしたので、姉二人の結婚式には出席できずに、後で写真を見せられて様子を知ったものでした。

昭和十八年に、旅順高女を卒業しましたが、卒業の少し前に、父は警察を定年退職して、開原で同じく警察におられた高山さんという方に誘われて、奉山線（奉天・山海関）沿線で奉天から約二時間程のところにある、新民県新民街の街公署の副街長に就任していて、新民街にやはり単身赴任していました。

母たちは、開原の官舎を出て駅近くの家に移り、すぐ上の姉夫婦と生活をしていましたので、私もそこで一緒に住むこととなりました。一番上の姉は、主人が奉天の満鉄に転勤になったために、奉天駅前の宮島町にある満鉄社宅に住んでいました。

家に帰った私は、戦争たけなわの時代でしたので、職に就いていない人は徴用されるとのことで、開原満鉄病院の佐藤さんのお世話で、病院の

薬局で働くことになりました。勤めることは初めての経験でしたが、元来、病院での消毒液の臭いが嫌いで病院は避けていたので、皮肉な巡り合わせでした。薬局には薬剤師が二人おられて、私と満人の陳さんの二人が毎日、外来患者と入院患者の薬を渡していました。薬剤師の資格も無いのによくやっていたものと、今思うと冷や汗が流れるような気持ちですが、あのころは人手不足と薬の種類も少なく、処方箋もなんとか読めていました。満鉄病院には看護婦さんも大勢いて、寄宿舎も立派なものがありました。ときどき病院内で非常呼集の訓練がありましたが、それ以外はすごく平穏で、戦局がだんだんと劣勢になっているなどということは、みじんも考えませんでした。

まだ数え年十八歳のころでしたので、病院内でも一番若くて皆さんにかわいがられました。病院に勤めている間は満鉄社員でしたので、新京で開催された満鉄主催の弓道大会にも参加し、優勝をしました。

病院勤めは昭和十九年の初めごろまでで、母と私は父の赴任先の新民街に移りました。

四　運命の生活始まる

開原駅からみんなに見送られて汽車に乗り、奉天を経由して新民駅に着きました。新民の駅はちょっと小高い所にあったので、改札口から続く幅広い階段を降りると、そのすぐ左側に、大きな門構えと石造りの塀に囲まれた官舎が、六軒ぐらいありました。そこで、久しぶりに父を囲んでの親子三人水入らずの生活が始まりました。

新民街は蒙古に近いということもあって、砂漠地帯の一角で、道路も砂地質でちょっと風が吹くとたちまち家の中も砂だらけになってしまい、掃除が大変でした。そのうえに水利が悪く、もちろん水道などという設備は無く、井戸が頼りでしたが、その井戸水も飲み水にはなりません。飲料水は、官舎に満人の水汲みおじさんがいて、そのおじさんが毎日手押車を引いて街の中心地から運んでいたのです。水を自由に使えないということ

は、大変なことです。

父は、毎日馬車の出迎えで街公署に通っていました。私も一日中家にいることもならず、父の世話で県公署の職員に採用されて、新民高等小学校に隣接した幼稚園の先生になって、二十人ぐらいの子供たちを教えることになりました。前任の方が辞めて困っていたので随分と喜ばれましたが、慣れない仕事で大変でした。毎日オルガンを弾いたり、歌ったりお遊戯をしたり、また紙芝居を見せたりで大変でしたが、いろいろな性格の子供たちがいて楽しくもありました。

在留日本人が少ないので、小学校は複式学級で、校長先生以下教師二人、女の事務員一人そして満人の小使いさん一人という少人数でした。高等科の女子生徒に、お裁縫を教えてくれとの依頼もあって、初めての体験でしたが教えることになりました。

年に一度の運動会も、開原と同じように広い運動場で住民を交えていろいろな競技をしましたが、子供たちと輪になっての遊戯が特に印象的でした。

昭和十九年の秋には、官舎の人たち全員でダアチョ（荷馬車）に乗って、ブドウ園にブドウ狩りに行き、たわわに実ったおいしいブドウをたくさん食べて、来年もぜひにと約束をして帰ったのですが、とうとう実現はしませんでした。新民地方は、砂地のために西瓜なども大変においしくてよく実っていました。幼稚園勤務で、今でもよく思い出す人は馬夫の王さんで、毎朝早く来ては、薪を割ったり掃除をしたりしていて、実直でよく働いている人でしたが、その後どうしたかと、ときどき思い出しては気にかかっていました。

官舎には毎日のように来客があって、父は何かと忙しそうでした。協和会の事務長の野沢さんは、岩手県出身で父とは同県人ということで気が合っていて、毎晩のように来て二人で楽しそうにお酒を酌み交わしていました。

昭和十九年には、奉天の満鉄にいた義兄に召集

令状がきて出征しましたし、同じころ開原の義兄にもやはり召集令状がきました。奉天の姉には、四歳と二歳になる幼児と、この年の三月に生まれたばかりの赤ん坊がいましたが、奉天上空にもB29爆撃機が来襲するようになり、危険だということから、父が家族四人を引き取って官舎に連れて来たので、いっぺんに七人家族となりにぎやかになりました。四歳の子は私の幼稚園に入り、みんなと楽しそうに遊んでいました。

昭和二十年の夏近くなったころ、戦局がいよいよ厳しくなった情報が次々と入り、日本本土への引揚げの話が出て、荷物の整理が始まりました。大事な物から行李などに詰め込んで、一時的に庭先に掘った大きな防空壕に入れました。持ち運びが大変なミシンとかタンスなどの金目の家具類は、父が連れて来た複数の満人に安い金額で売ったようでした。

日ソ不可侵条約を結んでいるソ連軍が、侵攻して来るという噂が流れ出したころになると、新民にあった「馬の病院」と言っていた守備隊の将校たちが、慌ただしく荷物を持って新民駅に向かっている姿を、何が起きたのかといぶかりながら眺めていました。

それから間もなくのこと、ソ連軍が侵攻して来るから、女、子供は、巨流河（奉天・新民間に流れている大きな河）を越して避難するという話が伝わりました。父を除いた家族六人は、官舎の人たちと一緒に、各人で持てるだけの物を持ってダアチョに乗って新民を出て巨流河に向かいました。巨流河は渡し船で渡り、対岸の学校のような施設で二泊ぐらいしたように思います。そのうちに、すぐに官舎に戻るようにとの連絡が入り、今度は貨車に乗って官舎に戻りました。

そして間もなく八月十五日を迎え、雑音がひどくて天皇陛下のお言葉もよく聞こえないラジオで、終戦を知りました。すべてが混乱していて何が何だか分からない一、二日が過ぎているうちに、官舎の裏窓からよく見える駅のホームでは、

頻繁に貨車が出入りしていました。よく見るとその積荷の上にはソ連兵が銃を持って乗っていましたが、さらによく見ると、それらのソ連兵の着ているのはボロボロの軍服のようなものでした。女性の兵隊もいたようです。そしてその後に、日本の兵隊さんが大勢乗っている列車が入って来て、ホームに降ろされて武装解除を受けたようで、ホームには小銃や剣や軍刀などが、山のように積み上げられました。

そのときに、「暴動だ！」という叫び声で驚き、近くにあった物を持てるだけ持って官舎から逃げ出しましたが、私は小さい子供二人の手を引いて裏門から外に逃げようとしたのですが、もうそのときには暴徒は入り口まで来ていて危険だということで、父が防空壕の上にあがり空に向けて数発、拳銃を撃ちましたが、暴徒はひるまずに官舎の中に入って来ました。暴徒の先頭には満人だった県長がいました。父は日本刀を抜いて私たちを守ろうとしていましたが、県長になだめられて、その代わりに誰も危害を加えられずに逃げることができました。そして、百メートルぐらい先にあった満鉄の社宅で空家になっている家に逃げ込みました。

そこには、武装解除を受けた日本の兵隊たちもいて、看視のソ連兵も五、六人いました。ちょっと落ち着いて官舎の方を見ると、暴徒は私たちの官舎からどんどん家具などの目ぼしい品々を持ち出している最中でした。私は、頭の中が混乱してしまいました。

空家だと思った社宅も、一足先に略奪にあって何もかも持って行かれたようでした。この満鉄社宅街には、約二百人ぐらいの武装解除をされた日本兵が一緒でしたので大変に心強く、看視のソ連兵も自動小銃を持っていましたが、大勢の日本兵がいたので手出しができず、また、暴民も社宅街には入って来ませんでした。この日本兵は、北支から奉天に向かって移送されたそうです。将校は、ソ連兵に軍服を剝ぎ取られて、敗戦の悲哀を

痛切に感じているようでした。

食糧は、ソ連兵がどこからか持ってきましたが、馬糧としていた高粱（コーリャン）が主で、これをドラム缶に入れて煮て岩塩を加えたもので、ほとんど湯汁のようなものでした。それでも兵隊さんたちが一生懸命に炊いてくれたものでしたので、粗末にはできずに食べましたが、お腹を通過するとすぐに下痢の症状になりました。兵隊さんが社宅の囲いの外側に穴を掘り、アンペラで囲っただけの急造の便所を造っていましたので、そこに駆け込んで用を足していましたが、子供たちも便所に連れて行かなくてはならず、夜中でも何度も通ったものでした。姉は、赤ん坊のお乳の出が悪くなり、赤ん坊も火のついた如くに泣き出すので、周囲の人々に迷惑がかかるのを気にしてひと晩中お乳を吸われ通しで、ほとんど一睡もせずかわいそうでした。

ソ連兵は、見回りに来ては若い女を探していましたので、私も顔に土を塗って薄汚くしていて、バリカンを持っていた兵隊さんに頭を丸坊主にしてもらいましたが、当時は緊張していたので、髪の毛が無くなっても何とも感じませんでした。そのうちに軍服上下をもらい、足にはゲートルを巻いて、完全に男の格好にしていました。そして毎朝広場での体操も一緒になってやっていました。

そのころ、収容されていた社宅街に県公署の官舎で一緒だった高山さんが来られて、一同はびっくりしました。高山さんは私たちとは別行動で、一日早く奉天に向かったグループでした。高山さんの話では、先発隊は巨流河で、ソ連兵とそれに同調していた暴民とに襲われて、多くの人々は巨流河に身を投げてほとんど全滅したそうです。幸いに生き残った数人が奉天にたどり着き、そのことを私たちに知らせるために、高山さんは線路沿いを歩いて新民にまで戻ったとのことで、私たちはただ驚くだけでした。

五　奉天での避難生活

私たちは、それからしばらくして貨車に乗せら

れて奉天に向かいました。何時間かの後に奉天駅に着き、四列縦隊になって歩かされました。列の両側には自動小銃を構えたソ連兵が付いていました。着いたところは北陵でした。歩いているあいだ中、子供たちは兵隊さんの肩車に乗っていましたが、おかげで大した危害も受けずに収容されたことは、不幸中の幸いでした。

北陵での第一夜は、立派な建物のある広場での野宿でした。生まれて初めての野宿でしたが、九月というのに、その夜はあまり寒くもなく助かりました。疲れていて少しはまどろみましたが、熟睡はできずに過ごしました。そんな夜に、兵隊さんが二人してソ連兵によって射殺されるという悲しいことが起こりました。

翌日に、あの立派な建物の中に入れられましたが、そのときには既に兵隊さんたちの姿も無く、高山さんも見当たりませんでした。後に知りましたが、全員シベリアに連行されたのでした。男性では父だけが助かりました。高齢と見られていたのでしょう。あのときにシベリアに行っていたら父も生きてはいなかったと、つくづく運命のいたずらということを感じました。

私たちが収容されたところは、学校の教室のような部屋でしたが、そこにはソ連軍の女の将校がいて、乾パンと砂糖をくれました。久しくまともな食べ物を食べておらず空腹に耐えていたので、とてもおいしく感激したものでしたが、全部日本の関東軍が残置していった物で、これで日本人の私たちが助かって、何とも複雑な思いがしたものです。

収容生活中の栄養失調で、子供たちの腹部がだんだんとふくれてきて心配していましたら、ビタミンCの注射を子供たちにしてくれて助かりました。あのままの状態が今少し続いていたら、子供たちはみんな亡くなっていたかもしれず、皮肉にもソ連兵に襲われ、次いでソ連兵に助けられたことになります。女性将校からは廊下の掃除を命ぜられたり、いろいろな使役に狩り出されたりしま

した。
北陵での生活は約一週間ぐらい続いていましたが、その後解放されて奉天市内の小学校に移り、やはり教室のようなところに入れられました。夜になると、ソ連兵が女狩りに現れるので、息をひそめていました。トイレも部屋の真ん中に洗面器を置き、それに用を足しました。その教室での生活は三日ぐらいで、その後奉天市のはずれにある満鉄社宅の空家に移ることになりました。
そこに移って間もなく、父が市内で姉の住んでいた家の隣の大野さんにばったり会い、ぜひ私の家に来てくれということで、家族七人が大野さんの家に行くこととなりました。大野さんのところにも子供さんが二人おられて、私たち七人家族と二世帯で住むことになり、やっと布団の上で寝られるようになりましたがそのころ姉は、肺炎のような症状がひどくなっていて、つらい生活でした。
そこは宮島町といって、三階建ての社宅が建ち並んでいて、団地のような棟が広い土地に整然として建っていました。私たちはその団地の二階の大野さんの家に入ったのですが、姉のいた家には見ず知らずの人が入っていましたが、暴動に遭ったようで一階は鉄条網が張り巡らされていました。水道が使えなかったので、団地内にある井戸から汲みあげて、それぞれの家へバケツで運んでいました。
最初のころは、大野さん所有の食糧を少しずつ分けてもらっていましたが、そのうちにお金も底をついて買えなくなりました。私は、春日町の商店街でタバコ売りをしました。売りに行くときの服装は、やはりソ連兵がどこにもいたので、満鉄社員の制服をもらってそれを着て、女だと分からないようにして売りに出ました。その当時珍しかったカルピスも売りましたが、生まれて初めての物売りで、少々抵抗感がありましたが、生きるためと悲壮な覚悟を持っていたので、少しずつ慣れるに従って気持ちの上からも余裕と落ち着きが

出てきました。売れたお金で食べ物を買って帰ったものです。

大野さんが、満鉄の倉庫からお茶箱を持って来ましたので、家中総出で茶袋を作りそれにお茶を入れ、父がお茶の名前を筆で書き、それを私が持って売りに歩きましたが、買ってくれる人はほとんど満人で、日本人もときどき買ってくれました。

そのうちに、隣の棟にいた深谷さんが春日町の裏通りで食堂を始めるので、手伝ってもらえないかという話があり、お隣の菅原さんの奥さんと一緒に頭にスカーフをかぶって手伝いに行きました。主にカレーライスを売り出しましたが、噂を伝え聞いてお客さんもぽつぽつ来ましたが、またもやソ連兵が「女はいないか？」と言って店をのぞくので、そのたびに私たちは裏口から逃げなくてはならず、ほとんど商売にならなかったのではなかったかと思います。

深沢さんは、満鉄の食堂営業所におられた方なので、そんな商売を始めたのだと思います。食堂に手伝いに行っているときに、大野さんのところの二歳になる男の子が急病で亡くなり、まねごとのようなお通夜をして、翌日社宅前の空地に穴を掘り埋葬しました。

そのころになると、社宅の隣の空き家に、北満方面から逃げて来た避難民が次々と入って来ましたが、ほとんどは女性と子供たちだけで、着の身着のままでぼろぼろになった服を身にまとって、銘々が空き缶をぶら下げただけの姿でした。何とか助けてあげたくても、こっちも裸同然なので何もしてあげられませんでした。そのうちに発疹チフスが流行して、毎日のように亡くなる人が出て、だんだんと増えてきました。父たちはその人たちのために空き地に大きな穴を掘って、遺体を次々と埋めていました。せっかく苦労してここまでたどり着いたのにと思うと、本当にかわいそうでした。父は、どこからか僧侶を連れて来て、亡くなった人々の供養をしていました。まだどうに

か土を掘れる気候だったので良かったと思いました。

だんだんと寒くなり、井戸の周囲にも氷が厚く張り始めてくると、水汲み仕事も大変でした。そのうちにストーブで燃やす燃料も無くなり、父は大野さんと満鉄の保線区に行って線路の枕木を運んで来て薪を作り、それで何とか暖を取ることができました。

あるとき、父は一人で奉天駅から貨車に乗って、開原にまだ残っている次姉たちの様子を見に行き、無事でいることを確認して戻って来ました。帰宅してから家族一同と相談して、開原に戻ることにしました。昭和二十一年一月に、七人の家族は奉天駅に向かいましたが、汽車に乗ることなどはとても危険なときでしたので、皆大変な思いをして奉天駅に着き列車に乗り込みましたが、車内は満員で満人の声で騒然としているうえに、ときどきソ連兵が何事かわめきながら入って来るので生きた心地はせず、毛布を頭からかぶって人々の足の下にうずくまっていました。怖い思いをしましたが、無事に開原駅前の我が家にたどり着くことができました。

姉は二歳になる男の子と二人きりで避難生活をしていましたが、幸いなことに開原の家は暴動にも遭わずにいたので、何とか暮らすことができていました。病気になっている姉を、すぐ布団に寝かせることもできました。

開原にいた姉は一月が出産予定でしたので、私たちがこの家に着いて間もなくして出産しましたが、すぐに亡くなってしまいました。家の裏庭に埋葬することにしましたが、土面が凍っていて掘るのが大変でした。ストーブに燃やす燃料が無かったので、生まれた赤ん坊も寒さで亡くなったのだと思います。

上の姉は、そのころからお腹がだんだんと大きくなってきて、ちょうど腹膜炎のような症状でしたが、薬も無くどうすることもできずにかわいそうでした。ジャガイモをすりおろし粉を少し加え

て練り、それを布に塗ってお腹に貼ると良いということで、毎日それで湿布をしましたが、あまり効果は無かったようです。

そのころになると、外出する人たちはほとんどいなくて、みんな家の中に閉じこもっていましたが、父は綿入れの満人服の上下を着て、知り合いの家を訪ねて古着を求めて、それを市場に持って行って売り、幾ばくかのお金を稼いでいました。そのころ開原村には八路軍が進駐して来て、八路兵は家々をのぞき見していましたが、我が家では病人が寝ているのを見てびっくりして帰りました。

ある日の夜、不意にものすごい爆発音がして、家の窓ガラスが全部粉々に割れてしまいました。寒さの厳しい時期でしたので、大変に困りました。男手一人の我が家では、年をとった父が一人で畳を上げて床板をはずして、それを切って窓をふさいでいました。後で分かったことですが、開原駅の裏手にあった守備隊の隊舎に泥棒が入り、持っていたランプの火が火薬に引火して、大爆発を起こしたとのことでした。

そのうちに、開原の街公署におられた横田さんが、居酒屋を始めたので、手伝ってくれないかということで、私が働くことになりました。開原街中心地の満人経営の銭湯の横で始めたのですが、お客さんは、ほとんど国府軍の兵士でした。ソ連兵とは違って危険なことはなかったのですが、私たちの他に避難民の女性三人が働いていて、私はレジ係でした。坊主頭でしたので、ターバンのような物を頭に巻いて働きました。

あんなに混乱していた状態の中でも、商売をする人がいたということは不思議に思いました。

ある日の夜中に、家の前でピストルの音がしたので、窓のすき間からそっと見ると、男の人が雪の中に倒れていて、馬車が逃げ去るのが見えました。だが私はどうすることもできずに、ただ見ているだけで恐ろしいことでした。後始末を誰がしたかも分かりませんでした。

開原の街には、終戦直後はソ連兵が入って来て、街はずれに住んでいた日本人は、強奪やらいたずらには遭ったようですが、街全体としてはそれほど荒らされることもなく過ごしていました。その点は、新民よりは良かったようです。

我が家では父と私が働いて、九人家族を養っていたわけです。

そんなときに、国府軍の警察局長であった汪さんという人が、私の働いていた居酒屋にまで来て、私を養女にもらいたいという話を持ち込んできました。日本人居留民会を通じて、是非にという真剣な話でした。汪さんは日本の大学を出た方で、日本人とは少しも変わらない流暢な日本語を話していましたが、居留民会の手伝いをしていた父からは、近々に引揚げが開始されるという情報があるということを聞いていたので、丁重に断りました。汪さんからは、お米一俵をいただき随分と助かりました。しかし、そのとき汪さんの言うことを受け入れていたら、私の運命はどうなってしまったかと考えると、背筋に冷水が流れるような気持ちになります。五月になると、引揚げの話が始まりました。

十軒ぐらいずつの単位で班を作り、その班毎に名簿を作りました。一番上の姉は茨城県を本籍地とし、次の姉は秋田県が本籍地となり、両親と私は岩手県で、みんなばらばらになりました。

引揚げ話が具体的になり始めたころになると、上の姉の体の具合は悪くなるばかりで、ジャガイモの湿布の効き目もなかなか出てきませんでした。引揚げの話がだんだんと具体化してくるに従って、姉を連れて帰国できるかどうかということで、家族一同は悩みましたが、姉一人を残して帰国するわけにもゆかず、無理をしてでも何とか一緒に引き揚げることになりました。

引揚げの際は、現金、貴金属など金目の物は一切持っては駄目とか、一人でも違反者がいたならば、その班全員が残されるという厳しいものでしたが、私たち家族のように全員裸同然の者には、

全く関係の無いことで、軽い気分でした。
　五月下旬、いよいよ待ちに待っていた引揚げが開始されて、みんな開原駅の広場に集まりました。私の友人、知人もみんな集まったはずですが、誰とも再会して喜びを分ち合う余裕も無く、国府軍の兵士が一人一人の身体検査をするので緊張し、恐怖心にかられながら列を作って並んでいました。
　父が姉を背負い、母が赤ん坊をおんぶして並び、私は五歳と三歳の男の子を連れて、リュックサック一個だけを背負っていました。検査を通って貨車に乗り込むとき、病人だけが一両連結されていた有蓋車に乗せてもらうこととなり、私が付き添って乗りました。一両しかない有蓋車も、病人で満杯となっていました。
　毛布を床に敷いて姉を寝かせ、満鉄病院の佐藤さんからいただいたビタミンの注射を毎日私が打ちました。食べ物はほとんど受け付けなくなっていました。何日貨車に乗っていたのか、今になると記憶がはっきりしませんが、貨車は動いたり止まったりしていました。両親と子供たちは無蓋車に乗っていましたが、雨降りのときは大変な難儀だったとのことでした。
　姉は時々うわ言で、義兄が迎えに来ているなどと言い出して、私は一人で涙を流していました。数日貨車に揺られて、やっと目的地のコロ島に着いたころは、姉の容態はますます悪くなり、下車するときには班の方々が担架のような物を急造して、それに乗せられて下ろされました。私も、これが最期になるかと思い二人の子供を連れて来て会わせましたが、もうそのときはほとんど意識は無くなっていて、しばらくしてそのままの姿で息を引き取りました。忘れもしない六月二日のことでした。わずか二十六年の短い人生でした。その夜は、暴動によって何も無くなった空き家の小さな部屋に姉の遺体を運び入れて、お通夜のようなことをして私がずっと付き添っていました。班の方が、どこからかローソクや線香を探してきてく

ださいました。有り難いことでした。その夜には、姉の頭の中から虱がぞろぞろと出てきて、まったく地獄の様相でした。

翌日、班の方によって、少し離れたところの小高い岡に穴を掘って、毛布にくるんだままで埋葬しました。気立ての良い、やさしくてきれいな姉でしたが、三人の幼な子を残しての死は、さぞ心残りであったろうと思うと、あらためて涙が出てきました。

そんなことがあって、数日コロ島にいましたが、食べ物は各人がそれぞれ持っていた物や、地元の露店みたいなところで買った米を、レンガで囲った急造のかまどで雑炊のようなものを炊いて食べていました。

やっと引揚船が入港し、母は赤ん坊をおんぶして、家族八人船に乗り込みました。姉がいないのが寂しいことでしたが、形見として遺髪と、遺爪を大事に抱いての旅立ちとなりました。

引揚船では、全員船底に入れられましたが、初めての経験で不安でした。しかし、乗組員も周囲の人々もみんな日本人でしたので、ほっとした安心感に浸ることができました。

船は港外に出ると大変な揺れで、みんなは船室でごろごろと転げ回るような状態でした。アルミの食器に入った雑炊の食事でしたが、船酔いでほとんどの人が食事を受け付けない有様で、甲板上にあった便所にたどり着くのも大変でした。

甲板では軍医さんによる検診もありましたが、船内で亡くなる人も多く、遺体は水葬に付されていました。

多分、一週間ぐらいかかったと思いますが、やっとの思いで佐世保港に着きました。佐世保港に近づくと、みんなは「陸地が見える、日本が見えたぞ！」と言って甲板に上がりましたが、木々の緑が鮮やかで、何ときれいな景色だろうかと、しばらく見とれてしまいました。初めて見る日本の山々に、何かしら不思議な気持ちになりました。

いろいろな防疫、手続きなどを済ませてやっと上陸してみると、進駐軍の姿が目に入り、まず最初に驚きました。そこいら辺りを歩いている人たちは、さっぱりした服装をしていて、私たちのような惨めなかっこうをした人はおらず、何だか夢を見ているようでした。

至る所から、『リンゴの歌』が大きく流れていて、一瞬、日本には戦争が無かったのかと怪しんだほどでした。私たちは終戦以後、随分とひどい体験をしてきたので、それくらい異様に感じたのです。

また、収容所に入れられて名簿の点検、引揚先に行く手続きなどで数日過ごしました。そこで再びＤＤＴを頭からかけられたことを、今でも鮮明に覚えています。

引揚列車は定員の三倍ぐらいの乗客で、車内の便所に行くのも大変なことでした。車窓からの景色は、大陸のそれとは全然異なり、線路のすぐそばにまで家がありびっくりしました。大阪で別の列車に乗り換えて、岩手県の帰郷先に向かいました。

一般乗客の方から、真っ白く大きな白米のお握りをいただき、夢のようでした。何時間かかかって一の関駅に着き、そこから門崎にやっと到着しました。父が電報を打っていたので、叔母の知り合いがリヤカーを引いて駅まで迎えに来てくれて、そのリヤカーに乗ってやっと叔母の家にたどり着きました。

叔父も叔母も大変に良い方で、私たち八人を温かく迎えてくれましたが、今思うと乞食（こじき）のような姿の大家族を迎えて大変だったことと感謝しています。ここでお世話になっている間に、父が亡くなった姉の夫の実家に連絡を取ったところ、幸いに先に復員していた義兄が飛んで来て、子供三人と再会しましたが、姉が亡くなっていることを知り、ただただ涙、涙でした。

それから数日後、父の実家の千廏町の家に移り、みんな温かく迎え入れられました。次姉は、

義兄がまだ復員していなかったのですが、秋田の実家に子供を連れて行きました。

それから父は、千廐町の食糧営団に勤務することになり、私も東磐井の郡地方事務所に就職し、毎日山越えをして通いました。

茨城に行った義兄は二人の子供とともに生活をしていましたが、一番下の子がだんだんと体の具合が悪くなり、こっちに引き取って千廐町の病院に入院させましたが、腹膜炎の炎症となり、七月二十六日に亡くなりました。避難生活中の栄養失調が原因でした。わずか一年半の寿命で、かわいい盛りになっていたのにと思うと、哀れさがこみ上げて涙が流れます。

それからは、私は両親と一緒に生活をしていて、父は昭和三十七年に七十三歳で、母は昭和四十八年に七十九歳でそれぞれ天寿を全うしました。

希望を持って渡満し、昭和二十年の終戦を、そして引揚げ、両親は大変な苦労をしたと思いますが、再びどうにか内地に帰ることができたことは、不幸中の幸いでもあります。満州の地で無念の涙を込めて亡くなられた方の事を思うと、何とも言いようがありません。ただ、御冥福を心からお祈りするのみです。

私の引揚げ体験

東京都　塚田　斉

はじめに

私は満州の地に生を受け、戦後引き揚げるまでの約二十年間を満州で過ごした。その時代は日本が軍国主義に突き進み、日中十五年戦争と言われる泥沼に足を踏み入れてから、だんだん抜き差しならなくなっていった時期でもあった。そうして昭和二十（一九四五）年八月八日、日本に対して宣戦を布告したソ連軍が、雪崩を打って満州に攻め込んで来た。既に関東軍は南方に引き抜かれて